

主日礼拝説教「キリストのパン」

日本基督教団石神井教会 2018年7月1日

【旧約聖書日課】エレミヤ書 23章23～32節

23 わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。

わたしは遠くからの神ではないのか。

24 誰かが隠れ場に身を隠したなら、わたしは彼を見つけれないと言うのかと、主は言われる。

天をも地をも、わたしは満たしているではないかと、主は言われる。

25 わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、「わたしは夢を見た、夢を見た」と言うのを聞いた。26 いつまで、彼らはこうなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、27 互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける。彼らの父祖たちがバアルのゆえにわたしの名を忘れたように。28 夢を見た預言者は夢を解き明かすがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語るがよい。

もみ殻と穀物が比べものになろうかと、主は言われる。

29 このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる。

30 それゆえ、見よ、わたしは仲間どうしでわたしの言葉を盗み合う預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。31 見よ、わたしは自分の舌先だけで、その言葉を「託宣」と称する預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。32 見よ、わたしは偽りの夢を預言する者たちに立ち向かう、と主は言われる。彼らは、それを解き明かして、偽りと気まぐれをもってわが民を迷わせた。わたしは、彼らを遣わしたことも、彼らに命じたこともない。彼らはこの民に何の益ももたらさない、と主は言われる。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 5章2～11節

2 ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。3 割礼を受ける人すべてに、もう一度はつきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。4 律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。5 わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、「霊」により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。6 キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。

7 あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか。8 このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方からのものではありません。9 わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。10 あなたがたが決して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとしてあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は、だれであろうと、裁きを受けます。11 兄弟たち、このわたしが、今なお割礼を宣べ伝えているとするならば、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。そのようなことを宣べ伝えれば、十字架のつまずきもなくなっていくことでしょう。

【福音書日課】 マルコによる福音書 8章14～21節

¹⁴弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。¹⁵そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。¹⁶弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。¹⁷イエスはそれに気づいて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。¹⁸目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。¹⁹わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは、「十二です」と言った。²⁰「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うので、²¹イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

「パン種に気をつけよ」

福音書は、わたしたちが後に従うべきお方である主イエス・キリストのお姿を伝え物語るものであると同時に、主イエスの後に最初に従った弟子たちの姿を伝え物語るものでもあります。その弟子たちの姿は、わたしたちの目から見て、決していつも模範的なものであったわけではないかもしれませんが、そうであればこそ、それは、わたしたち自身の姿を表しているものであるとも言えるのです。

今日の福音書でも、弟子たちは、主イエスの旅に同行する道中で、うっかり忘れものをしてしまっています。舟で湖を渡っていくというときに、パンを持ってくるのを忘れてしまったのです。主イエスは、いつも旅を急がれていました。一つ所にいつまでも留まることなく、次から次へと町を移り行き、人々に教え、御業をなされていたのです。休む間もなく働かれる主イエスの後に従っていた弟子たちにとって、舟に乗って湖を渡っていく時間は、貴重な休息のとき、また食事に充てるときとなっていたのかもしれませんが、ところが、舟の中で済ませるべき食事のパンを人数分、準備するのを忘れてしまっていたのです。手元にあったのは、だれかがたまたま持ち合わせていたのでしょうか、パン一つだけでした。

そのとき、弟子たちは、「仕方がない。岸に着いたら、すぐにパンを買いに行って、人々が集まってくる前に急いで食事を済ませよう」と決めていたのかもしれませんが、ところが、主イエスが口にされた言葉を聞いて、弟子たちは慌てたのです。「先生は、自分たちがパンを用意してこなかったことを、お咎めになられているのだろうか。確かに、用意が悪かった。先生のお働きを支えるべき自分たちの不手際だから、先生に責められるのも当然だ」と。しかし、一方でこう主張する弟子もいたかもしれませんが、「わたしたちは、先生がたった七つのパンを四千人に分けて満腹させたことを見たばかりではないか。わたしたちには、一つのパンさえあれば、先生が皆を満腹させてくださるに違いない」と。

弟子たちの議論は、それはそれで必要なものだったかもしれませんが、けれども、主イエスは、そのとき、弟子たちに別のことをお示しになろうとされていました。「パン種に気をつけなさい」。あの四千人、五千人の食事の出来事を振り返りながら、そうお教えになられていたのです。

キリストに結ばれていればこそ

「パン種」は、パン生地を発酵させるために残して取って置かれる少量のパンです。小麦粉をこねてパン生地を作るときに、少しのパン種を加えれば、全体が発酵し膨らむのです。聖書の時代の人々は、各家庭でそのようにしてパンを作っていましたから、パン種が何を意味するのか、だれでもよく分かったのです。

今日の使徒書「ガラテヤの信徒への手紙」を記した使徒パウロも、「**わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです**」という言葉を書いています。もちろん、パウロはここでパン作りのレシピを教えているわけではありません。少量のものが全体に影響を及ぼすことをたとえて、そのような言葉を記したのです。おそらく、当時の人々の間で何の説明も必要とせず、ことわざのように用いられていた言い回しだったのでしょう。そうであるとしても、パウロは、この言葉を記すことによって、かつて主イエスが語られたと伝え聞いていたことを、教会の人々に思い起こさせようとした、ということもあったのではないのでしょうか。主イエスが、舟の中で弟子たちにお語りになられた、あの言葉です。

「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい。」

ファリサイ派の人々やヘロデは、主イエスと対立していた人たちです。彼らの人々に対する影響力は決して小さなものではないと、主イエスは警戒されていたのです。弟子たちの中に彼らの影響が少しでも及び始めると、それがいつの間にか無視できないほど大きくなって、弟子たちの考えや行動を左右し始めるだろうと、主イエスは警告されたのです。

パウロもまた、同様の危惧をガラテヤの教会の人たちに対して抱いていました。ガラテヤの教会は、パウロが開拓創立に大に関わった教会です。パウロにとって、ガラテヤの教会の信徒たちは、自分が腹を痛めて産んだ子供同然でした。

パウロが彼らに教えた福音は、明確なものでした。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこでもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」（ガラ 3:26~28）。ところが、そう教えたはずの教会に、別の教えが入り込んできていたのです。パウロの教えた福音を覆してしまうような教えです。キリストとの結びつきを軽んじ、むしろ別の社会的な結びつきを重視するような教えが、じわじわとガラテヤの教会の人たちの考えを変え、振舞いにも影響を与え始めていたのです。

パウロの福音は、「**キリスト・イエスに結ばれていれば**」に尽きるのです。キリストと結びついた者だけが、地上のしがらみから自由にされて、ただキリストの愛を实践する者とされるのです。キリストと結びつき、真の神を知ることによって、わたしたちは、地上にある諸々の力から解放され、自由にされ、神の子として一致し生きるようになった。それなのに、どうして再びあなたがたは、地上のものにすぎない力に、自分の身を委ね、考えも行動も縛られ始めてしまうのか。

パウロは、「パン種」のことわざを用いて、そう訴えるのです。

パンは一つ

旧約日課「エレミヤ書」のエレミヤは、南王国の末期、人々の神に対する背信を指摘し、王国の滅びを預言して語った預言者です。当時は、預言者と呼ばれる人々が大勢活躍している時代でした。しかし、多くの預言者たちは、エレミヤのように預言せず、むしろ、人々の宗教活動を誉め、王国の安泰を預言していたのです。実のところ、人々には、エレミヤの預言が正しいのか、ほかの預言者たちの預言が正しいのか、当初は判断できなかったようです。

しかしながら、伝えられているエレミヤの預言の言葉を見ていくなれば、彼らの語った預言の真偽を見極めるためのヒントとなる言葉があることに気づきます。エレミヤは、こう預言して告げているのです。「いつまで、彼らはこうなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける」(26~27節)。

偽りの預言は、人々が神の名を忘れるように仕向けるのです。偽りの教えは、人の心を神ならぬものに向けさせ、キリストならぬものと結び付けようとする。エレミヤが戦った信仰の戦いを、主イエスも戦われ、使徒パウロも戦ったのです。

舟にパンを持ってくるのを忘れた弟子たちでしたが、そのとき、どういうわけか一つのパンは持ち合わせていた、ということが福音書には描かれていました。しかし、そう描かれているのは、「十人以上の大の男たちのために、パンが一つきりでは、何の足しにもならない」と言いたかったからではないでしょう。弟子たちはそう考えたかもしれませんが、福音書は間違いなくここで、「他のものとはかく、一つのパンは確かに船の中にあった」と語っているのです。

一つのパン、いいえ一かけらのパンでもよかったのかもしれませんが。何となれば、それは、まさに主イエス・キリストのパンに他ならないからです。主イエスが手ずから裂いて、弟子たち皆に分け与えてくださるはずのパン、たった一つのキリストのパンに他ならないからです。

五千人の人々を前にして、主イエスは、五つのパンを裂いて弟子たちに分け与えさせ、十二の籠いっぱいパン屑を集めさせられました。四千人の人々を前にしては、七つのパンを裂いて弟子たちに分け与えさせ、七つの籠いっぱいパン屑を集めさせられました。その主イエスは、最後の晩餐の席で、一つのパンを裂いて手ずから弟子たちに分け与えられたのです、「取りなさい、これはわたしの体である」(マルコ 14:22)と言われながら。そのパンを受けた弟子たちは、主のご復活の後、世界中に出て行って、自分の手の中にあるパンを裂いて、人々に分け与え続けました、主の「これはわたしの体である」との御言葉を唱えながら。

主の分け与えられた一つのパンは、無くなりません。そのパンを受けた者の内でパン種として働き、さらに分け与えられるべきパンを生み出してきたのです。わたしたちも、そのパンに与ります。キリストと結びつくしるしです。キリストがわたしたちの内に宿られるしるしです。そして、それは、わたしたちもまた、ただ一つのキリストのパン種によってキリストのパンとされ、裂かれ、分け与えられる者とされるしるし、一致のしるしなのです。